Arts-Based Research における ウォーキングメソドロジーの位置づけ

橋　本　大　輔
桜美林大学芸術文化学群

Walking methodologies in arts-based research

HASHIMOTO Daisuke
College of Performing and Visual Arts, J. F. Oberlin University

キーワード：Arts-Based Research（ABR、アートベース・リサーチ、芸術的省察による研究）、Walking Methodology（WM、ウォーキングメソドロジー、歩くこと）、A/r/tography（アートグラフィー）、Mapping（マッピング、地図作り、cartography）、探究・探究の技術・生きる探究、フラヌール（flâneur）

はじめに

本論文では近年 Arts-Based Research（ABR）およびアートグラフィー a/r/tography [1] において重要な方法論として認められているウォーキングメソドロジー（walking methodology、以下 WM）とはなにかということについて考察する。特に、その方法論がいかなる意味で ABR において重要視されうるのか、ABR という動向において WM がいかにして位置づけられているのかについて考察する。

「歩くこと」が ABR において重要視されているのは、これまで行われてきた ABR の実践がその多くの場合において「歩くこと」にかかわるものであったことからもみてとることができる。日本国内における受容をみてみると、まず笠原広一らが主導する「Arts-Based Research による芸術を基盤とした探究型学習理論の構築」科研において、笠原が参加している国際共同研究プロジェクトである「Mapping a/r/tography: transnational storytelling across historical routes of significance」との連動による「Mapping A/r/t」の実践が行われている。この実践内では、「熊野古道を歩く」、「Mapping A/r/tography in Tokyo〈歩く〉から生まれる探求」というような歩くことをとおして行われる探究というものに焦点が当てられていた。

一方、小松佳代子が研究代表者である「判断力養成としての美術教育の歴史的･哲学的･実践的研究」科研においては、「ABR on ABR」展および「Art = Research」展という制作者による実践的な作品制作・展示をとおした研究において、歩くことが意識的・無意識的に取り入れられていた。ABR on ABR 展では、櫻井あすみが「迷うためのアトラス」において自身が歩き写真を撮る中で出会われるものの中で逡巡するというアトラスを提示し、三好風太が「ノゾメ様を訪ねて」の制作に際して東海村を歩く実践を行っている。Art = Research 展においては、櫻井が「texture of refrains」において同様に歩くことにかかわるアトラスを提示し、三好が「窃視症者のための追憶」において小川家住宅と自身の出会いから生成される物語を紡ぐために地域を取材するという実践を行っている。櫻井や三好が歩くことを手法として好んでいるという側面も確かにあるが、それだけでなくほかの制作者においても展示する場所性について思考する制作者がその場所へかかわろうとするとき、歩くという方法論が重要になってくることが見出された（小松 2021）。

美術制作において歩くことが重要になってくるということは、同じく小松が研究代表者である「美術制作の感覚を伝える言葉の研究」科研における参加した制作者の「制作未満のもの」があらわれる場としても重要な位置づけとなるものであった。A/R/T 研究[2]においても、第 17 回研究会において齋藤功美が「土地の記憶」と題したワークショップで彼と彼の祖父にゆかりのある東村山を歩く実践を行うなど、ABR としての歩くことについての関心は深まっているといえる。

本論文では、まず WM とはなにか、どのような性格をもつのかということを先行研究、特に近年 WalkingLab を主導し、歩くことを「リサーチクリエイション research-creation」として実践しているスプリンゲイとトルーマンの論述（Springgay & Truman, 2018）を中心にして把握し、そのうえでそれらが ABR においてどのように位置づけられているのか、ABR における WM の可能性と課題とはなにかについて考察する。

1.　ウォーキングメソドロジーとはなにか

WM をだれが最初に提唱したのかということを示すのは困難な問いである。これは歩くことが人類に普遍的な事象であること、そのことを方法論として自身の探究に自然と組み込んできた人間が無数にいるといえるからである（Solnit, 2001）。

WM が意識的に研究手法として用いられるようになったのは 1990 年台後半から 2000 年台にかけての質的研究においてであり、特に 2000 年以降の文化地理学、社会人類学における発展が先行していたといわれている（Lorimer, 2011, p.19）。

人類学における WM の代表的な論者であるインゴルドは、リーとの共編著において、歩くことを人類学的な研究に持ち込んだのは『身体の技法』におけるマルセル・モースであったが、そのことは長い間忘れ去られていたと述べている（Ingold & Lee, 2008, p.1）。モースは歩くことに言及していたが、それは共同体の内部における歩くことがいかなる意味をもちうるかという身体技法の型としての観点を脱していなかった。ピエール・ブルデ

ューはそのような構造主義的な観点を批判し、ハビトゥス概念によって構造における身体が慣習的行為を無意識的に習得し、それによって思考や行為が方向づけられるとした。

こうしたよく知られた社会学的な言説に対してインゴルドとリーは「動きの中の思考 thinking in movement」として身体とその行為を再考することで、考えることや感じることが歩くことの方法だと主張できるとして次のように述べている。

「考えたり感じたりすることは、主観的な心の状態と客観的に与えられた物質世界の条件との間に、外面的な接触や対応関係を設定することではなく、形成された世界の中を自分の道を切り開いていくことであり、その動きは、私たちの周りにいる他者の動き（その人の旅を共有したり、その人の道を横切ったりする）とリズミカルに共鳴すると同時に、出発点も最終目的地もないオープンエンドなものである」（Ingold & Lee, 2008, p.2）。

すなわち、従来の社会学では身体技法の型やハビトゥスとして構造に紐づけられた慣習や行為が思考や感覚の前提条件であったのに対して、運動のただ中で生成し、運動とともに変容し続ける、主観的―客観的の二分法を超えた存在の絡み合いを問題とするような社会学を構想すること、そのことにおいて歩くことが重要になってくるということを彼らは主張しているのである。

このような「歩くことの研究 walking studies」が依拠する歩くことに対する関心についてロリマーは以下の四つをあげている。すなわち、「場所の産物としての歩くこと」、「日常生活の中での歩くこと」、「自己―中心的な歩行者の省察」、「気ままで芸術的な歩行者」である（Lorimer, 2011, pp.20-27）。

場所の産物としての歩くこととは、歩くことが特有の場所において行われる行為であり、そのことによって特異化された文化的経験としてあらわれるということである。ある地域の伝統や習慣と密接に結びついた歩くことは景観や地形の関連性によってルートを形作られる。また、場所の境界線の打破としての歩くことということもあり、領土を確認―再構成する行為としても歩くことは行われうる。

日常生活での歩くことは、われわれが人を超えた動きの流れ、社会的関係、体現された関係性において歩くことをあらわしており、このことについての分析は民俗学的研究の格好の対象でもある。こうした歩くことは手段としての歩くこととして考えられることも多いが、そうした産業革命以後の「歩くことの断絶」（Solnit, 2001, p.265）にとらわれない、歩くことが存在の中心であり、場所の知識を学び教えるための継続的な手段であるような先住民のグループもある。

自己―中心的な歩行者の省察とは、歩くことをとおして自らの存在を省みるような哲学的な行為としての歩くことである。これは「わたしはどこにいるのか？」、「わたしはどのくらい遠くに来たのか？」、「わたしは十分遠くまで来たのか？」というような自己の内面

的な領野への関心をもとにして歩くことを意味する。こうした方向での歩くことは、社会的な慣習や制度などの外的な要因よりもそうした外的な意味との関係性のただ中において形成される「出会いの親密さ」にもとづく主観性の探究を問題にする。この手法はオートエスノグラフィックな伝記的研究としての WM の方向性を示している。

気ままで芸術的な歩行者とは、WM において度々主題となる政治的に精通した活動家および芸術的な傾向をもつ人物という二つの側面で語られる歩行者のことである。政治的に精通しているというのは単に体制への反抗的な態度や政治参加を意味しているのではなく、場所への愛着や記憶に精通し、それらとの関係性のただ中で生成する活動に身を置くということである。そして、そうした政治性は歩くことの実践を芸術的なものとして表象することがある。現代アートにおける歩くことの実践は、個々人で歩くことを超えてコミュニティで歩くこと、場所への介入という機会を提供し、歩くことそれ自体、歩くことによって出会われるものへの省察を促す。

以上に述べたロリマーがいう四つの関心は WM にもとづく研究が共通してもちうる関心として多くの場合に当てはまることである。より簡略化して述べるならば、歩くことに関する外部性―内面性および日常性―非日常性をいうものとして解釈することができる。これらの関心がなぜ起こっているのかということは、特に社会学人類学的な研究における民族誌学的な研究が、研究対象をデータとして扱い、客観的に把握しようとすることで取りこぼしてしまう質的な知というものを、それら研究対象の「内側から学ぶ」ということでくみ取ろうとし、従来の研究手法自体を問い直そうという動向が関係性している。

これは、いいかえれば西洋中心主義的・男性中心主義的であるといいうる「観察者」主体の社会学研究を問い直し、「マイナー」で弱い立場への関心、理解を推進するという方法論的な問い直しを含んでいる。WM は実際にフェミニスト活動家や、被差別者の権力的な布置を問題にするような論者が積極的に用いているという現状がある。これは、歩くことが身体的に場所や権力構造と結びつき、そのただ中で起こっているものを主観の感覚的な言説を捨象しない仕方で語り、実践に開いていくという行為として解釈されているからである。「動きの中の思考」はその実践において、質料形相論的な主体―客体関係を問い直し、それまで思考の主体や対象と思われていなかったような存在やその絡み合い自体を「動きの中で」把握し生成する。そのような運動が WM における歩くことなのである。

ここで、WM における主要なテーマについてスプリンゲイとトルーマンが示している四つの概念をさらに参照したい。すなわち、「場所 place」、「感覚的探究 sensory inquiry」、「体現すること embodiment」、「リズム rhythm」である（Springgay & Truman, 2018, pp.4-6）。

場所とは先にロリマーが示したように歩くことにおいて不可分に関係していることであり、さらにスプリンゲイとトルーマンによれば「特定の場所 specific location」であり「過程または出来事 process or an event」のことでもある。そこにおいて歩行者は歩くことによって「場所づくり place-making」をし、身体、環境、感覚的な事象を結び付けるような動

きを実現するのである。ここで注目されるのは場所が前提とされるものではなくつくられるものであるという認識である。場所が特定のものでありある過程―出来事でもあるということは場所の進行中 on-going な性格を示すものであり、それが歩く主体とともに生成する becoming という事態を示している。ここにおいて場所は存在論的に歩行者と不可分なものとして考えられており、WM はそのような場所について考えると同時に場所自体をつくりかえつつある運動して把握されるのである。

感覚的探究とはそうした歩くことにおいて不可避に生じる多様な multi-modal 感覚を主題とする探究であり、特に視覚にとらわれない感覚を重視するものである。歩くことはそれをとおして地面との絶え間ない応答を生み、風や音、臭いの流れの中を動くことである。それらは場所とも密接にかかわっており、そうした特異な環境とそれによって引き起こされる感覚を当事者的に探究の俎上にあげるということが歩くことをとおして目指される。サラ・ピンクはこのことを感覚的エスノグラフィー sensory ethnography と呼び、データ収集を旨とする方法論を批判し、エスノグラフィーを「理解、認識、そして（学術的な）知識が生み出される、再帰的で経験的なプロセスである」と主張している（Pink, 2009, p.8）。

体現することとは、歩くことが再帰的で経験的なプロセスであることによって、そこで生成される知が精神・身体・環境をつなげる運動に体現されるような性格をもつということである。この体現するという語は現象学的な意味合いで一人称あるいは一つの主観の出来事として用いられるものであるが、スプリンゲイとトルーマンは場所と身体を包括したより政治的･社会的･物質的なものとしてとらえることが必要であるとしている（Springgay & Truman, 2018, pp.50-52）。これは、一人称としてとらえられる体現されたものそれ自体が社会的な事象の絡み合いによって成立しているものであり、それは同時に物質的な関係性と不可分に成り立っているからである。スプリンゲイとトルーマンは体現することの過程を「物質変容性 transmateriality」、「身体変容性 transcorporeality」という二つの変容性から説明している。この二つの変容性は歩くことにおいて一つの出来事の二つの側面のようなものとしてあらわれる。歩くことは場所の中を身体が移動することである。そのことは同時に身体という物質が環境という諸物質との関係性において運動していくということである。このことはスプリンゲイとトルーマンが言及しているように「内部―作用 intra-action」（Barad, 2003, p.815）としてポスト人間主義的な遂行性において実在としての物質や身体が立ちあらわれてくるということを示している。ここで変容と訳した trans- には横断する、超越するという意味も含まれている。歩くことによって体現されるものはまさに「人間以上の more-than-human」世界であり、主知主義や人間中心主義によってではない世界のとらえ方なのである。

リズムは歩くことにおける時間的な契機として欠かせない要素である。ソルニットは歩くことのリズムが思考のリズムを形作ると述べ、「精神は一時間に三マイル進む」という警句を残している（Solnit, 2001, pp.5-10）。歩くことにかんするリズムは場所において体現されるものであり、また、ドゥルーズ＝ガタリがいうようなリトルネロとしての差異化の

反復としてもあらわれる。リズムは動きの中の思考を形作ると同時にそれを特徴づけるものである。それはある規則的な周期を刻むということだけではなく、進行中の運動の軌跡がつねに変容し続けているという出来事を指すものでもあるのである。

以上にロリマー、スプリンゲイとトルーマンらによる WM におけるいくつかの基幹となる関心や概念について参照した。ここでわかることは、歩くということが存在の絡み合い entanglement のただ中で思考し運動することとして考えられており、それはその都度特殊化される再帰的な活動だということだ。このことが社会人類学的な研究において「内側から知る」という方法としての WM へと展開しているのであり、これは「わたしたちがともに働く物質の流れやその変動に絶えず応答しながら、それらとともに進行するように振る舞う」（Ingold, 2013, pp.6-8. ／インゴルド 2017、p.26）という「探求の技術 art of inquiry」として ABR にとっても重要である。

2. Mapping としての歩くこと

冒頭で述べた近年の ABR の動向である「Mapping A/r/t」の実践の特徴は、WM が意識的に取り入れられていることに加えて、ABR および歩くことを「地図作り cartography」として解釈していることである。

アートグラフィーの主導者であるアーウィンは、アートグラフィーの実践が生成 becoming するものであるということを示す文脈で、歩くことを地図作りとして説明している。それによれば、「歩くことは実験や地形の感覚的安定化に抗うことである。歩くことは時間の中で動きをつくり出し、実験を地図化していくプロセスである」（Irwin, 2013, p. 211. ／笠原＆アーウィン 2019、p.33）。そして、ここで重要なのはこの地図が「地図としてのリゾーム」であることである。これはオサリヴァンが述べているようにドゥルーズ＝ガタリが『千のプラトー』で論じたリゾーム概念を踏襲したものであり、再現的 representational な思考や実践を超えて生成変化する進行中の出来事を自在に横断したり分解―再構築したりすることを指しているということである（O'Sullivan, 2006, p.35）。

ドゥルーズ＝ガタリはリゾームをシステム内での自由で横断的な接続、自分に新しい要素が接続されるか切り離されるかするたびに性質を変える多様体、そして現実をトレース trace するのではなく線を付け加えるたびに変化していく地図である、という三点で要約して説明している（Deleuze and Guattari, 1987, p21. ／ドゥルーズ＆ガタリ 2010、pp.51-53）。すなわちリゾーム＝地図であり、アートグラフィーにおいて歩くことはリゾーム的な実践であるということができる[3]。

リゾーム的な実践としての歩くことというアイデアはアートグラフィーに特有なものではなく先にみた WM の先行する諸研究における歩くことにも共通する特徴である。場所やそれとの関係性によって生じる絡み合いを問題にする研究は、理論的にも実践的にもすぐれてリゾーム＝地図を体現している。わたしはこの地図はそれをつくり出すことによって再帰的に主体も生成変容するような記号―実在の絡み合いとしてのフィクションであ

り、その意味では芸術制作＝地図作りともいいかえられるような射程のある概念だと解釈している。こうした性格が、WM が ABR と親和性があるということ、ABR の実践をする際に歩く探求が多くみられることの原因であるとみることができる。

3. ABR におけるウォーキングメソドロジーの位置づけ

ABR は地図作りをすることだと一つの定義としていうことができるがゆえに、WM とも必然的に深いかかわりをもつ。「探求の技術」およびリゾーム的実践としての歩くことは、教育的鑑識眼および批評の能力・判断力を養成することというアイスナーが構想した ABR の質の把握という教育的側面（小松 2021 所収予定）にも深くかかわるものということができる。教室に浸透する質や芸術作品に浸透する質を判断することは、それらとともに歩くこと、その質のリゾーム的な性質を把握したうえで新しい線を加えた地図を描くこととして創造的な行為としての批評をそこで行うことにつながる。そして WM は、ABR を芸術的省察による探究とみなすような制作者による探求における、モノとのやり取りをとおして思考のレイヤーを積層していくような探求においても同様に有効な視座を与える。歩くことのリゾーム的な性格はそのまま制作することのリゾーム性といいかえられることで、制作＝歩くこととしてつねに進行中の前―制作ないし制作―中ともいいうるものとして歩くことは作品制作と密接に関係している。ある作品の完成には絵の具と画面の応答がそこにあるだけではなく、その作品がつくられるまでに歩かれ描かれた地図が同様にそこにあるのである。

おそらくこのことに気づいているがゆえに制作者は自分の制作を伝える言葉を紡ごうとする際にしばしば歩く。それは、歩くことによって自分が自分として成り立っているその地図を眺めなおし、そこに新たな線を描き加えるという批評的な実践であり、自己―批評の活動として自分と自分の制作についての鑑識眼・鑑識耳・鑑識鼻等々をそこで生成しているのである。

WM における地図作りは「反―地図作り counter-cartography」（Springgay & Truman, 2018, pp.100-107）ともいわれ、従来の地図が西洋中心主義的に領土を切り分けてしまうことへの批判的な含意が込められている。こうした傾向は「反―アーカイブ counter-archives」や「人間以上の」といったような、何らかの中心的な概念や権力構造への抵抗という意味を歩くことに帯びさせている。これは WM が「マイナー」な立場に焦点を当てるという意味でジェンダー論者や人権論者によって展開されているという現状からもみてとることができる。このことは、ある権力構造からの政治的な契機としての歩くことを論じることにつながり、同様にして作品制作における主体形成とその政治性もまた差異化のプロセスと集団の関係性として論じられうる。

ABR が徳としての判断力や市民性教育などの倫理的・社会的展開の可能性があるとすればそれはリゾーム的なものとしての地図を描くことで自らを新しい地図として改めて歩くことによってである。この歩くことは、自ら―環境の物質―身体的な変容と不可分にな

されるものであり、「どこでもないところからの眺め」（Nagel, 1986. ネーゲル 2009）ではない視点で世界を眺めることである。

ここで、WM における歩くことが帯びている政治性と視座の問題から、ABR に関して再考すべき問題提起がなされているということに目を向けてみたい。それは「フラヌール flâneur」が男性中心主義的な概念であり、WM において容易に使用されるべきではないという批判である（Springgay & Truman, 2018, pp.54-57）。フラヌールについては三好が「芸術的知性による『パサージュ論』の拡張」ということで「潜在的な」過去を遊歩することをとおしたフィクションの生成によって賦活するようなものとしての芸術および芸術的知性の可能性を論じていた（三好 2021）。また、アートグラフィーにおいてはラジック・カッチャーとアーウィンが遊歩する芸術家の探究を好意的にとらえて、「ゆっくりとした学問 slow scholarship」としてのフラヌール的探究について論じている（Lasczik & Irwin, 2018, Chapter. 6）。

フラヌールは、ベンヤミンが用いる意味としては都市を風景のように眺め、観察・鑑賞するためだけにぶらつく男性のことをいう（Benjamin, 2002）。実際にはベンヤミンはフラヌールについて体系的に論じているのではなく、断章の連続によってその像を浮かび上がらせているにとどまる。都市を風景のように眺めるという態度には都市からどこか隔たりをもってそれを対象化するということが含まれている。このことによってフラヌールはただ眺めるだけの存在として都市自体とのかかわりによる自己の変容や物質的―政治的な参与ということからは遊離している。そして、19 世紀当時にそのように遊歩できるという身分は男性であり、かつ歩くことに従事できるほどに経済的な余裕がなければできない。また、フラヌールは注視者的な視座に立ち、世界を風景として眺めることで視覚優位な知覚様式において存在している。

フラヌールの概念は、パリのパサージュをうろつく男たちという概念を超えて、放浪する芸術家や思索家を表現し、自由な歩行にもとづく探究をいいあらわすものとして現在では広く浸透している。フラヌールはいわば社会学的な観察者やさらには「まれびと」としてある文化的な構造を眺め、それを判定するようなものとして一般化されることで、民族誌学における一つの研究モデルとなり、近年の WM においては先に述べたような歩くことを代表する概念として用いられるようにもなっている。しかしながら、フラヌールは先に述べたように男性的で、場所や存在の絡み合いからは距離をとっており、視覚優位な経験を示すものとして WM における歩くこととは必ずしも一致しないどころかむしろ相反するものでもある。

先に述べた歩くこととフラヌールの根本的な違いはフラヌールに「物質―身体変容性」が欠けているということに求められる。いいかえれば、フラヌールはリゾーム的でないのである。リゾーム的な地図作りはつねに再帰的にその質的全体性に描き加え続けるという運動そのものを指すが、フラヌールは空虚な一つの主観が移動してピクチャレスクな世界

として視界を風景化する。リゾームは変容しながらもその存在の絡み合いからは決して逃れられないが、フラヌールはある隔たりにおいて対象を判定する。この歩くことに関する二つの視座は、ジェンダー論的な問題を抜きにして考えても興味深いずれがそこにある。

WM が帯びている既存の研究手法への批判意識は、歩くことを質的な全体性を象徴する運動として一種の理想化をしているということができる。歩くことが人間以上を思考するような行為であったとしてもそれが WM として実践されるにあたっては、言語化や具体的な活動のアーカイブを形作る。そうしたリサーチクリエイションとしての WM は、それ自体がリゾーム的であるということは主張できるにしても、その内部に権力構造としての領土化の作用をつねにはらんでいる。そこでは、概念的にリゾームであると主張できたとしても、実際には通常の分析的・科学的等々の思考が介在している。歩くことが脱領土化や再領土化に開かれていると述べるのは簡単だが、逆に一歩引いて考えてみると、WM において「本当に歩けているのか？」という疑問がわいてくる。わたしは、ABR が受容される過程で歩くということが盛んに、それも実際に足で大地を歩くという行為で実践されていることに疑問をもっていた。さらにいうと、そうした歩くことが WM として方法論化されているという状況にも違和感をもっていた。すなわち、一つの権力構造となりつつある WM に対して不和を抱いていた。

WM の理論的背景にあるリゾームやバラッドらの新しい実在論はポスト相関主義的な理論として強力な磁場をもっている。人間中心に世界を把握するのではなく「それ以上」の関係性を主題とする存在論は、主観の絶対性と同程度に強固な関係性の（絶対的でないような）絶対性を前提とする。このことが WM の可能性であり、その方法論を導入した ABR の意義でもあるが、それは同時に存在の喧騒の息苦しさとそこからの隔たりのなさを意味するものでもある。

小松が主導する制作者による探究、芸術的省察による研究としての ABR の文脈においては、歩くことが意識的に用いられる場面があっても、そこではリゾーム的な存在の親密さを重視するよりもむしろ隔たりやまれびと性に着目し、半透明なレイヤーを重ねていくというような、距離をとることや不可避の距離にどう応答するかということに重きが置かれていることがほとんどであった（小松 2018a、菊池 2018、小松・櫻井 2020、三好 2021）。このことが、フラヌールという概念への親縁性を生んでいたのだと推察できる。また、制作者はなにかを伝えようとする際にそれを「編集」し、一つのフィクションをつくり、内容を意図的に攪乱しさえする。そもそも、芸術作品や作品制作が一つの地図作りとして解されるとしても、それはなにかであってなにか別なものを同時に指し示す記号的な実在であり、即自的な地図としてのみ解されるような単一的な存在ではない。本来、地図概念は単一的なものを想定してはいないだろうが、想定していないという構えによって実際に生成された地図が単一的なものにならないということはない。芸術作品は単に歩くことからは生まれえない。これは、多くの歩くことが芸術作品であることを意図していないからでもあるが、それよりもまず、芸術的な手つきとしての距離の感覚が付与されてい

るかどうかということも関係しているとわたしは考えている。

WM における歩くことはときにあまりにも直接的で逃れ難い。そのことは是非を問うような性質ではなく、一つの強度として理論を位置づけているものである。先にわたしは WM を「探求の技術」と接続し、リゾームとしての地図作りを作品制作に比して説明した。このことは、WM の可能性を示すものではあるが、WM の使用がすなわち ABR を定義づけるということや、芸術は歩くことである、というような定義を示すものではない。また、それに対抗するようなフラヌールや隔たりの思考こそが芸術の要件だと主張するのでもない。本論文では WM との関係において ABR を論じてきたが、ABR は WM にはとらわれずに多様な展開をすでに示している。リーヴィーは Fiction-Based Research（FBR）として文学的な見地から ABR を考えようとしており（Leavy, 2018, Chapter.11）、岡原正幸らは「アートを使う」という方針で「表現を通じたライフのシェア」による「エンパワーメント」を起こすような社会学を構想している（岡原、2020）。ABR は多元性にもとづくものであり、WM が背後からすべてを回収できてしまうような性質（歩くことの普遍性）をもっていたとしても、つねに逃れ去るようなものとして「民主化」されうる。

重要なのは、ABR および WM においても、その実践が果たして「本当に」アートベースであり、「歩いて」いるのかということを批判的に省察することであり、その方法論によって自らがなにを探究しようとしているのかを進行中の動きの中であれ省みることである。一つの研究や方法論としての ABR や WM はその理想的な形態を概念的に描きえたとしても、それを実践としてそのまま実現できるものではない。作品制作や歩くことの探究に身を置く際に、それがリゾームや自由であるとみなすだけで結果としての作品や地図がそれを体現するものになるのではない。WM における存在の絡み合いのただ中における探求は、WM という確立された前提に依拠するのではなく、リサーチクリエイションとしてその都度更新され、生成するものでなければならない。それが生成するという概念によってそうなるのではないことをふまえたうえで。

おわりに

以上にみてきたように、WM とは歩くことでリゾームとしての地図作りを行うような、場所・歩行者・社会を含む人間以上の存在の絡み合いのただ中での探究の方法論であり、そのことは ABR における実践でも「動きの中の思考」にもとづく「探求の技術」として重要な意味をもつものである。WM は従来の研究手法や支配的な権力構造への批判意識とカウンターメソッドとしての性格があり、社会的弱者や科学的に扱い難い対象を研究の俎上にあげる試みでもある。しかし、WM はその再帰的・即自的な性格から、探究それ自体におけるリゾーム的な絡み合いから距離をとり難いという特徴があり、このことは芸術的省察における隔たりの感覚とはずれがみられる。それらをふまえたうえの ABR における WM の可能性とは、本来的な意味でのリサーチクリエイションとしての歩くことに

その都度立ち返り、その実践が権力構造化してしまうことから逃れ続けるような差異化のプロセスとして歩くことを問い直し続けることである。

今後の課題として、今回見出された WM と美術制作者のずれについて、その距離の感覚やフィクション性に着目してそのことの作品制作および ABR における意味について考察すること、リゾームと距離の感覚がいかにしてともに成り立つのかについての問いがある。制作者の探究は、行為のただ中での再帰的な関係性として性格づけられるが、その動きの中で中断や攪乱の契機をもっている。作品制作はその過程で触覚的に世界に体現（embody）されるように諸力のあいだにあるものであり、同時に一望的な視界をとることもあるような行為である。生成変容していることと距離をとることは対立する要素ではなく相補的なものである。このことについて今後も歩き、制作することをとおして考えていきたい。

注

1　本論文ではアートグラフィーを含む、芸術と研究の関係性を探る諸実践・研究を包括する概念として ABR という語を用いることとする。

2　2017 年から開催されている、東京藝術大学大学院美術教育研究室の修了生らが運営している研究会。制作者／研究者／教育者の複合的なアイデンティティにおいて自由に探究をする場として議論が交わされている。「ABR on ABR」展、「ART ＝ Research」展に出品したアーティストも運営・参加している。

3　リゾームは根茎のイメージとしてツリー構造と対抗するものとして語られることが多い。すなわち、一つの根源から波及するものとしてのツリーに対して自由な接続としてのリゾームがあるというわけである。このように考えるとわかりやすい図式化によってリゾームを把握することができる。しかしながらドゥルーズ＝ガタリ自身が指摘しているように、ツリーはリゾームと対立する概念というよりはリゾームに含まれる概念である。このことはオサリヴァンも注意を促しているが、ツリーとリゾームは同じものの二つの異なる側面というべきものであり、ことさらに対極にすべきものではない（O'Sullivan, 2006, pp.32-37）。よって、再現―トレースはリゾームと排他的なのではなくリゾームにおいて地図作りの一要素として書き加えられるものである。

参考文献

Atkinson, D.（2017）. *Art, disobedience, and ethics: The adventure of pedagogy*. London, England: Palgrave.

Barad, K.（2003）Posthumanist performativity: Toward an understanding of how matter comes to matter, *Signs*. 28（3）, 801-831.

Barad, K.（2007）*Meeting the universe halfway: Quantum physics and the entanglement of matter and meaning*. Durham, NC: Duke University Press.

Barone, T. & Eisner, E.W.（2012）. *Arts based research*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Benjamin, W.（2002）The Arcades Project.（E. Howard. & M. Kevin. Trans.）Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP.

Bourriaud, N.（2002）. *Relational aesthetics*. Paris: Les presses du réel.

Deleuze, G.（1994）. *Difference and repetition*（P. Patton, Trans.）. New York, NY: Columbia University Press.（財津理訳『差異と反復』河出書房 2007）

Deleuze, G. & Guattari, F.（1987）. *A thousand plateaus: Capitalism and schizophrenia*（B. Massumi, Trans.）

. Minneapolis, MN: Minnesota Press.（宇野邦一ほか訳『千のプラトー 上中下』河出書房 2010）
Dewey, J.（1934）. *Art as experience*. New York, NY: Penguin.（栗田修訳『経験としての芸術』晃洋書房 2010）
Gros, F.（2014）. *A philosophy of walking*.（J. Home, Trans.）. London, UK: Verso.
Ingold, T. and Lee Vergunst, J.（eds）（2008）, *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*. Aldershot: Ashgate.
Ingold, T.（2010）. The textility of making. *Cambridge Journal of Economics*. 34（1）, 91-102.（野中哲士「つくることのテクステリティ」『思想』No.1044、pp.187-206、2011）
Ingold, T.（2013）. *Making anthropology, archaeology, art and architecture*. Abingdon, England: Taylor & Francis.（金子遊ほか訳『メイキング―人類学・考古学・芸術・建築』左右社 2017）
Irwin, R. L. & de Cosson, A.（Eds.）.（2004）. *A/r/tography: rendering self through arts-based living inquiry*. Vancouver, BC: Pacific Educational Press.
Irwin, R. L.（2013）. Becoming a/r/tography. *Studies in art education*, 54（3）, 198-215.
笠原広一＆リタ・L・アーウィン（2019）『アートグラフィー 芸術家／研究者／教育者として生きる探求の技法』学術研究出版／ブックウェイ
笠原広一（2019）「Arts-Based Research による美術教育研究の可能性について : その成立の背景と歴史及び国内外の研究動向の概況から」『美術教育学：美術科教育学会誌』40（0）, 113-128
笠原広一（2020）「Arts-Based Research にもとづく小学校での探究的ワークショップ実践の開発 : 小学校 5・6 年生を対象とした図画工作科の関連実践として」『東京学芸大学紀要 . 芸術・スポーツ科学系』（72）, 77-97
菊地匠（2018）「芸術における〈隔たりの思考〉」小松佳代子編著『美術教育の可能性―作品制作と芸術的省察』勁草書房
小松佳代子編著（2018a）『美術教育の可能性―作品制作と芸術的省察』勁草書房
小松佳代子（2018b）「折りたたむこと、開くこととしての美術教育」科研費研究成果報告書『教育空間におけるモノとメディア―その経験的・歴史的・理論的研究』（研究代表者 今井康雄）
小松佳代子・橋本大輔（2019）「新しい実在論の理論的射程と美術の探究」『長岡造形大学研究紀要』第 16 号、pp.6-13
小松佳代子・櫻井あすみ（2020）「美術制作におけるアトラス的な知―空間と時間のレイヤー」『長岡造形大学研究紀要』第 17 号、pp.6-12
小松佳代子（研究代表者）（2021）科研費研究成果報告書『判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究』
小松佳代子（2021 所収予定）「ABR の由来」笠原広一編『アートベース・リサーチ：理論と大学教育への展開（仮）』学術研究出版 Bookway
Lasczik Cutcher, L. & Irwin, R. L.（2017）. Walkings-through paint: A c/a/r/tography of slow scholarship. *Journal of Curriculum and Pedagogy*,（pp 1-9）
Lasczik Cutcher, A. & Irwin, R. L.（Eds.）（2018）. *The Flâneur and Education Research: A Metaphor for Knowing, Being Ethical and New Data Production.* NY: Palgrave.
Leavy, P.（Eds.）.（2018）. *Handbook of arts-based research*, New York, NY: Guilford.
Lee, J., & Ingold, T.（2007）. Fieldwork on foot: Perceiving, routing, socializing. In Simon, C, & Collins, P（Eds.）, *Locating the field: Space, Place and context in anthropology*. Oxford, England: Berg.
Lee, N., Morimoto, K., Mosavarzadeh, M., & Irwin, Rita L.（2019）. Walking propositions: Coming to know A/r/tographically. The International Journal of Art & Design Education, 38（3）, 681-690.
Lorimer, H.（2011）New forms and spaces for studies of pedestrianism. In: Cresswell, T.（ed.）*Geographies of Mobilities: Practices, Spaces, Subjects.* Ashgate, pp. 19-34.
三好風太（2021）「歩き、思考し、物語る―芸術的知性によるベンヤミン『パサージュ論』の拡張」

科研費研究成果報告書『判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究』
Nagel, T.（1979）. *Mortal questions*. Cambridge, England: Cambridge University Press.（永井均訳『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房 1989）
Nagel, T.（1986）. *The view from nowhere*. Oxford, England: Oxford University Press.（中村昇ほか訳『どこでもないところからの眺め』春秋社 2009）
岡原正幸編著（2020）『アート・ライフ・社会学―エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房
O'Neill, M. Roberts, B.（2020）. *Walking methods: Research on the move*. London, England: Routledge.
O'Sullivan, S.（2006）. *Art encounters Deleuze and Guattari. Thought beyond representation*. London, England: Palgrave.
Pink, S.（2009）. *Doing sensory ethnography*. Thousand Oaks, CA: Sage.
Solnit, R.（2001）. *Wanderlust: A history of walking*. London, England: Penguin.
Springgay, S.（2011）. "The Chinatown foray" as sensational pedagogy. *Curriculum Inquiry*. 41（5）. 636-656.
Springgay, S., Irwin. R. L., Leggo, C., & Gouzouasis, P.（Eds.）.（2008）. *Being with a/r/tography*. Rotterdam, The Netherlands: Sense.
Springgay, S., Irwin. R. L., & Wilson Kind, S.（2005）. A/r/tography as living inquiry through art and text. *Qualitative inquiry*, 11（6）, 897-912.
Springgay, S., Truman, S. E.（2018）. *Walking methodologies in a more-than-human world: walkingLab*. London, England: Routledge.
Truman, S. E. & Shannon, D. B.（2018）. Queer sonic cultures: An affective walking-composing project. *Capacious: Journal for Emerging Affect Inquiry.* 1（3）.
Triggs, V., Irwin, R. L., & Leggo, C.（2014）. Walking art: Sustaining ourselves as arts educators. *Visual Inquiry: Learning and Teaching Art 3*（1）, 21-34.